

この国の空

高井有一

新潮社



この国の空

高井有一

新潮社



この国の空^{くに そら}

昭和五十八年十二月五日 発行
昭和五十九年十二月二十五日 三刷

著者 高井 有^{たか い}一^{いっ}も

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号

東京都新宿区矢来町七十一 一六二

電話 業務(03)二六六―五二一

編集(03)二六六―五四二

振替 東京 四一八〇八
定価 一三〇〇円

印刷 株式会社三秀舎・製本 大日製本株式会社
© Yuichi Takai 1983, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-10-311604-8 C0093

目次

一章	焰のあと	5
二章	身近な人たち	60
三章	花の道	116
四章	明日	176

こ
の
国
の
空

このくにの空を飛ぶとき悲しめよ南へむかふ雨夜かりがね

斎藤茂吉

一章 焰のあと

庭の楓の木の真上にあつた月が、いつの間にか見えなくなつてゐた。空はますます勢を増したらしい焰の色を映して明るい。月は、その朝焼けに似た明るさのために消されてしまつたのか、或いは既に沈んだのかどうかさだかでない。午前二時にならうとしてゐた。爆音は疾うに去つて、鎮まり返つたなかに、かなりの風があつて、楓の若葉を翻した。火が呼び起した風がここまで吹いて来てゐるのか、と里子は思つた。同じ風は前の日の夜明けにも吹いた。火の手が挙げたときには、必ず立つてゐられないほどの風が起り、降り注ぐ火の粉に髪の毛や睫毛を焼かれる、だから焼夷弾の火に追はれた人の眼はみな泣いたやうに赤い、と里子は聞いた覚えがあつた。夜が白み初めるには、まだ二時間余りがある。それまで風は熄まないであらう。

「父さん、どこ行つちやつたのよ、父さん」

向ひの家の女学生が、幼い子供のやうな声で父親を呼んでゐた。前の年の十一月末、初めて爆弾の落ちる音を聞いた日には、里子も不安に居たたまれず、遠くへ行く筈のない母をしきりに呼んだものであつた。

風は、縁側の硝子戸を明け放し、障子と襖とをすべて外した家の中を吹き過ぎた。

「寒い」

里子は両腕で胸を抱へて、傍の母を顧みた。母の葛枝は、縁側と接した敷居の間近くに膝を揃へて坐つて、防空壕の入口のあたりに眼をやつてゐた。筒袖の右肘から肩へかけてが汚れてゐる。壕の入口に立つて、爆音に満ちた空を見守つてゐるうちに、何かの弾みで土を擦つたのであらう。焰の色は、思ひがけない低空を、ほぼ正確に二列に並んで侵入して来るB二九の太い胴、四基の発動機のある翼までを薄赤く染めた。頭上にのしかかるやうに、次つぎと切れ目なく飛んで来る機体を振仰いでゐると、遊弋する巨大な魚の群を、水底から眺めてゐるやうな気がした。不思議に、焼かれるといふ恐怖からは遠かつた。

「お母さん、帰つて寝たら」

と里子は言つた。

「もう解除になつたでせう」

停電してゐてラジオは聞えないが、空の静けさは、警報が解除になつた事を告げてゐた。

「市毛さんは？」

と葛枝が訊いた。

「さあ、そこらに様子を見に行つたんぢやないかしら」

表の小路に人が集つて、口ぐちに何か喋つてゐた。市毛孟男もそのなかに交つてゐるのだらう。火が燃えさかつた夜には、警報が解除されたあとも、直ぐには寝付かれず、門口へ出て来る人が、必ず何人かはあつた。

「ちやあ、先に寝るわね」

大ぶりのズツクの鞆を肩にかけて、葛枝は腰を上げた。

「あんたも、あんまり遅くならないやうになさいよ」

庭を横切り、生垣の枝折戸を通つて消えて行く母を、里子は見送つた。市毛が戻つて来るまでは残つてゐたかつた。

前の年の冬に入つて間もなく、激しい雨が降つた日、里子の家の防空壕は水浸しとなり、入口の土を刻んだ階段が崩れ落ちた。すつかり掘り直さなくてはならなかつたが、女二人の手には負へず、人を頼む当てもなかつた。困惑してゐるときに、隣家の市毛孟男が、うちの壕へ入るやうにすればいい、と言つて呉れたのであつた。市毛はその頃、妻と子供を郷里の岐阜へ疎開させたばかりであつた。

「ぼく一人であんな所へ潜り込んでるのは心細いし、それに昼間は大抵留守にしますからね。あなた方が使つて下されば、心丈夫なんです」

この市毛の申し出を、親子は飲んで受けた。市毛の家の壕は三疊間ほどの広さで、しつかりとした角材を支柱にして、地面には簀の子が敷かれてゐた。奥半分に荷物を積込んで、三人が身を潜めるのに充分の余地があつた。

十二月初めの、天気の良い日曜日の午後、大がかりな空襲があり、西方の飛行機工場のあるあたりに、間断なく爆弾の落ちる音が聞えた。約二時間後、やうやく敵機が去つて壕を出てから、里子は市毛に向つて、

「このままではいけないわ」
と言つた。

「縁側の硝子戸、危いでせう。紙を貼らなくては」

爆風による破損を防ぐために、窓硝子には襷掛けに紙を貼るやうにとは、早くから隣組に通達されてゐた事であつたが、市毛の家ではまだ実行してゐなかつた。あれをすると檻の中にあるみ

たいで鬱陶しいと市毛が洗るのを、里子は、

「あたしがやります。綺麗に仕上げればいいでせう」

と無理に承知させた。

次の日曜日、里子は朝から市毛の家へ行き、戸の硝子を一枚一枚磨き上げてから、自分の家のよりもやや細目に切つた和紙を貼り付けた。市毛は、縁側に腰掛けて煙草を喫つたり、庭の隅の畑の菜をうる抜いたりしながら、時をり里子の手許に眼を注いでゐた。すべてをやり終へたのは三時に近かつた。斜め十文字に貼つた紙に雁字搦めにされたやうな八枚の硝子戸が、早ばやと傾きかけた陽を受けて光るのを庭の真中の池の傍に立つて眺めて、市毛は、

「何だか、もの哀しいね」

と呟いた。

「さうですね」

里子も頷いた。市毛が何を聯想してゐたかは判らないが、硝子戸が傷を負つて、繻帶を巻かれてゐるやうに思へなくもなかつた。

その時からちやうど半年が経つてゐる。夜間の空襲が激しくなるにつれて、警報とともに、身の廻りの物を僅かばかり容れた鞆を携へ、枝折戸を通つて市毛の家の庭に入り込むのは日常の事となつた。爆音が間近に迫らない日には、三人が縁側に並んで、黙つたまま腰を掛けてゐる。他人眼には、仲の好い家族が肩を寄せ合つてゐる光景と映るのかも知れなかつた。紙を貼つてしまつた硝子は、埃に汚れても磨きやうがない。

間もなく市毛が戻つた。彼は勝手口から井戸端へ行き、音を立てて嗽をしたあと、コップに水を汲んで、里子の所へ持つて来た。

「飲みませんか」

「あ、恐れ入ります」

つい数年前まで釣瓶を使つてゐた掘貫井戸の水は、滑らかで旨い。咽喉が乾いてゐた里子は、と息に飲み乾した。

「外で、何かありましたの」

「いや、別に」

市毛は肩に掛けてゐた防空頭巾を外して畳に投出し、大きく伸びをしてから、仰向けに寝転がつた。濃い髪が乱れて、瘦せてややしやくれ気味の顎が尖つてゐるのが、暗がりの中に影となつて見えた。

「お母さんは、寝たの？」

睡氣がさして来たやうな声が言つた。

「はい。あたしも、もう寝ます」

「その方がいいね。この分ちや、明日はまた、あなたは忙しくなりさうだ」

職を持たない未婚の女は全員が女子挺身隊として工場へ動員される事になつた前の年の夏以来、里子は町会事務所へ勤めてゐた。動員逃れの気楽な勤めのつもりだったが、男子職員が二人立て続けに応召して、僅か三人で全体の切盛りをするやうになつてからは、俄かに忙しさが増し、残業も珍しくはなかつた。東京は遠からず焼野原になると言はれ始めてからも、杉並区の西の外れにある碌安寺町には、人口の流入が続いてゐた。都心や下町の家を焼かれ、疎開をするまでの一時の足溜りとして、知人の家に身を寄せた人も多かつたであらう。荷物輸送が困難なために、地方へ行くのは諦め、いくらか安全なこの町へ越して来る人もあつたであらう。殊に大規模な空襲の

あとの数日は、転入や、罹災者への特別配給の申請をする人たちが列を作り、里子は殆ど一人でそれを捌かなくてはならなかった。煩瑣な手続に苛立つて大きな声を出す人と、殺気立った遣取りを交した事も、一再ではなくあつたのである。夜半の空襲で眠りを妨げられた日には、ざわめきが絶えない事務所に坐つてゐると、しつこい蠅の群に付纏はれてゐるやうであつた。

「ぢやあ、お寝みなさい。いつもお世話さまです」

里子は脊脱に降りた。

「ああ、お寝み」

寝転んだまま、首だけ里子の方へ向けて市毛が言つた。彼は、玄関に近い三畳間に敷放しにした蒲団へ眠るのである。妻子のゐなくなつた家が広過ぎて頼りないせゐだらう、と里子は思つてゐる。

雨戸を明けたままの座敷で、葛枝は眠らずにゐた。窓越しに見る空は、火の色が褪せず、その奥の方に、戦闘機らしい軽い爆音が響いてゐた。

「台所の薬罐にお湯があるわ」

寝床に腹這ひになつて、葛枝が言つた。

「ぬるくなつちやつたかも知れないけど、身体を拭いたら」

里子は薬罐を提げて湯殿へ行き、湯を金盥に移して手拭を絞り、身体の間ずみまでを拭いた。

空の赤みは湯殿の窓にまで映つて、風の音がしてゐた。汗をかいたわけでもないのに肌は匂つて、手拭が薄黒く汚れるやうな気がした。

座敷に戻ると、母はまだ同じ姿勢でゐた。

「雨戸、締めなくていい？」

「さうね、半分締めてもらはうかしら。朝あんまり明るいのは厭だから」

戸袋から戸を引出しながら、里子は身を乗り出して、隣家の方を窺つた。赤い空を背景に、若葉が小紋を散らしたやうに目立つ楓の梢が揺れてゐた。市毛はまだ眠る氣にならずに座敷にゐて、その動きを眺めてゐるかも知れなかつた。さうだとすれば、戸と戸が打当たる音も、彼の耳に届いてゐるであらう。

防空頭巾と鞆とを並べて枕許に置き、里子は横になつた。それを待つてゐたやうに、蔦枝が話しかけて来た。

「どうしてるかしらねえ、姉さん」

「またその話？」

わざと素気なく里子は言つた。

「暢氣に暮してるわよ。あの伯母さん、昔から生活力あるんぢやないの」

「だつて、手紙も来ないし」

「書く必要がないからよ。氣にする事ないわ」

「でも、何だか氣が減入つて」

「くだいなあ。ああするしか方法はなかつたんぢやないの。あたしたち、最善を尽したんだから、後めたく思ふ謂はれなにかないわ」

いい加減にお仕舞にしよう、といふ意志を示して、里子は寝返りを打ち、蒲団の衿に顎を埋めた。

二月末の、珍しく警報が一日中鳴らなかつた日、暗くなつてから里子が帰つてみると、駒込に住む伯母の瑞枝が、座敷に座蒲団も敷かないで、横坐りに坐つてゐた。

「あら、いらつしやい」

里子がいつもの通り気易く声をかけるのを遮つて、瑞枝は、

「焼け出されちやつたわよ。丸焼けよ」

と叫ぶやうに言つた。里子はぎよつとした。

「焼けたつて、お家が？」

「当り前よ。よその家ぢやない、あたしの家よ。すつかり焼けちやつたわ」

瑞枝の眼はどこか里子の後ろの方に注がれ、唇の周りにだけ薄い笑ひが浮いてゐた。それまで見た事のない表情に、里子はいろたへてその場を外し、台所にゐる母の所へ行つた。

「駒込の伯母さん、焼け出されたの？　様子が変ね」

「さうなのよ」

煮物の鍋に箸を入れてゐた手を休めて、葛枝は眉を寄せた。

「詳しく事情を知りたいと思つたんだけど、昂奮しちやつてて、どうにもならないの。あなた、御飯のあとで、あたしと一緒に話を聞いてやつてね」

その日の午後遅く、瑞枝は信玄袋一つを提げて勝手口に立つた。そして、里子に言つたのと同じやうに、焼けてしまつた、丸焼けだ、と繰返すばかりであつたといふ。

「それからずつと、ああして坐つたきりなのよ。ねえ、若しかして」

さう言ひさして葛枝は口を噤んだ。自分の想像に怯えたやうな気配があつた。

目刺しを三尾に白菜と大根の煮物を並べた膳の上を瑞枝は眺め廻し、

「御馳走ね」

と呟いてから、しばらくして、

「御飯は何膳食べていいの」

と訊いた。

「遠慮しないで、何膳でも。今日は特別にたっぷり炊きましたから」

ぎごちなく他人行儀に葛枝は言つた。しかし瑞枝は二膳で止め、三人ともろくに口を利かない食事は、十五分も経たない間に済んでしまった。食後に葛枝は、一つだけ取つてあつたパイナップルの罐詰を明けた。瑞枝は直ぐにフォークを取上げ、最後まで黙つて食べ終へた。それを見届けて、葛枝が言つた。

「姉さん、落着いて話して頂戴。家が焼けたといふのは判つたわ。それで、義兄さんや嶺雄ちゃんはどうなつたの」

「死んだわよ」

叩き付けるやうに瑞枝は言つて、まじまじと妹をみつめた。

「あの雪の降つた日よ。あいにく日曜日だつたわよねえ。役所も工場も休みだつたから、二人とも家にゐたのよ。だから、家と一緒に燃えて死んぢやつた。あたし、見たわけぢやないけど、きつとさうよ。さうに決つてる」

夢の名残りを追ふやうな瑞枝の話振りからは、事態を正確に知る事は難しく、葛枝は時どき訊問でもするやうに、声を励まさなくてはならなかつた。二月二十五日の昼少し前、食事を早く済ませて、瑞枝は浦和の知合ひの家へ、小麦粉を分けてもらひに出掛けたといふ。空襲警報が解除になつたからもう安心だと思つた、と伯母が言ふのを聞いて、里子は、その日は早朝と午後三時近くの二度、激しい空襲があつたのを思ひ出した。朝には艦載機約百機が、午後からはこれも百機を超す戦爆聯合の編隊が、東京と関東の各地を襲つたのである。正午ごろからちらついてゐた

雪が、俄かに視界を鎖すほどになったのは、頭上を圧さへ付けるやうなB二九の爆音が響いて来たのと同じ時刻だったと憶えてゐた。交通は杜絶して、瑞枝は家へ帰れなくなつたが、留守の間に家が焼けたかも知れないといふ惧れは抱かなかつたらしい。翌日は晴れたが、雪と爆撃の被害が重なつて、殆どの省線電車が不通であつた。都内までトラックに乗つて歸つて来た、と瑞枝は言つた。通勤輸送のために、特別にトラックが動いたのだらうか。家は焼けて跡形もなく、夫と中学四年生の長男の行方は判らなくなつてゐた。

「ぢやあ姉さん、義兄さんと嶺雄ちやんは、遺体が見付かつたわけぢやないのね」

「ええ、探したんだけどね、見付からなかつたわ」

「だつたら、どこかに無事であるかも知れないぢやないの」

瑞枝はしばらく黙つて、自分の膝頭をみつめてゐた。そして不意に顔を上げて、

「死んだわよ」

と強く言つた。

「あたしは丸二日待つたんだもの。焼跡の防空壕で、焼け残つた家の人が恵んで呉れた毛布にくるまつて。それでも、二人とも歸つて来なかつたのよ。生きてる筈はないわ。死んだのよ。きつと直撃弾で、粉微塵になつてしまつたのよ」

「姉さん」

葛枝は悲鳴に似た声を挙げた。

「解つたわ。もう余計な事、言ひません。義兄さんも、嶺雄ちやんも、歿くなつたのね」

「さうよ、死んだわよ」

瑞枝は緊張が弛んだやうに膝を崩し、葛枝は口の中で何か言ひながら、深く頭を下げた。